外国語部会

県研究主題 コミュニケーション能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　宮髙　史江（相模原地区）

＜研究主題＞ アルファベットの「音」の理解を４技能につなげる ―　単語を読める、書けるようになるための教材の工夫　―

１　提案内容

これまでの指導のなかで、３年間を見通して英語の「音」、またアルファベットと音との関係を指導することの重要性を感じた。英語に慣れ親しんできた素地を活かして、中学校１年生の初期の段階で、英語の「音」を理解し、習得させたいと考えた。その英語の「音」を理解することが、その他のコミュニケーション能力の基礎を養うことにもつながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

（１）実践の概要

①　英語に慣れ親しんできた素地（提案資料３・４ページ、アンケート結果より）

ア　ほとんどの生徒が、大文字を読んだり書いたりすることができた。

イ　英語でコミュニケーションをとることに抵抗を感じる生徒が少なく、ALT からの質問にも積極的に答える。

ウ　自分の将来の生活に英語が必要であると感じている生徒が大多数である。

②　授業実践

ア　単語を読むためには、アルファベットの読み方（＝名前読み）だけでなく、アルファベットの「音」（＝音読み）を理解する必要がある。

イ　単語を読むときに、子音、母音それぞれの音に注意し、英語らしい発音になるように指導し定着を図った。また、母音二重音字や子音二重音字などのルールを理解し、単語を読む練習をした。

ウ　英単語を聞いたときに耳に入ってくる「音」で、アルファベットが連想できることを目標とした。

エ　初めて英文を音読するときに、「英文は単語を１つずつ読むのではない。文の始まりからピリオドまでを１つのかたまりとしてとらえ、リズムができる」ということを指導した。それぞれの単語を読むときに、英語らしい発音を心がけて読むことはもちろん、リエゾンや弱くなってしまう音、変わってしまう音などにも留意させた

③　指導計画（提案資料６ページ、13ページ参照）

ア　初期の段階で「音」について重点的に指導するため、独自に１学期の指導計画を作成した。（授業の展開例として、36時間目の指導案をご参照ください）

（２）成果と課題（提案資料17ページ、アンケート結果より）

①　アルファベットの「音」の理解はおおむね達成できている。

②　普段から、生徒たちが英単語を英語らしく発音しようとする姿勢が見られる。

③　多くの生徒たちが、英語のリズムやイントネーション、リエゾンなどを意識して

英文を読もうとしている。

④　初めて見る知らない単語も読んでみようとする、積極的な姿勢が見られる。

⑤　単語を読むことに自信がついてきたことで、単語を書いてみたいと思う生徒が多くなってきた。

⑥　「音」の指導に重点を置いたことで、教科書の指導との時間配分が難しかった。１つの学年を複数の教科担任が担当することも考えて、年間を通した綿密な計画が必要である。

２　協議内容（参加者と提案者との質疑応答）

（１）Ｑ：ALT が生徒と１対１で発音テストをする動画があったが、他に ALT はどのような指導を行ったのか。

Ａ：ALT は導入時に「音」そのものを指導し、その後はだんだんとコミュニケーションの指導を多くするようにした。

（２）Ｑ：音の指導は評価が難しいと思うが、どのようにしたのか。

Ａ：観点を表現とした。

年間３回の定期テストでは基本問題を、単元テストでは応用問題を出題した。

（３）Ｑ：電子黒板（パワーポイント）と板書をどのように利用しているのか。

Ａ：電子黒板は次の画面にすぐに移れるので、フラッシュカードや題材資料を見せるときに使う。生徒がノートをとるものは板書する。

３　助言

（１）小学校での外国語活動が始まり、英語に慣れ親しませることを目標としている。中学校では専門性が加わり、体系的に学ばせていくことが求められる。

（２）３年間を見通した計画を、修正しながらより良い計画にしていくには、小学校からの接続に配慮すること、また小中の連携を大切にした指導態勢が必要である。

（３）今回の提案は、１学年前半段階までのレポートである。１学年後半・２学年・３学年とどう発展していくのか期待している。

提案２　　提案者　　渡邉　肇（県央地区）

＜研究主題＞
３年間を見通した言語活動の充実について　～自己の思いや考えを表現するために～

１　提案内容

外国語（英語）を通して情報を交換したり、意思疎通を図ったりするために、１年生から３年生まで段階を踏んで、自己の考えや思いを英語で表現する取組みを行い、そのための多くの知識や情報をインプットし、それを活用していく授業展開を行うことで、自己の思いや考えを外国語で相手に伝えることができるようになるのではないかと考えた。

（１）　実践内容

①　言語活動充実のための事前準備（小中連携と実践計画）

小学校５、６年生の英語年間計画により内容を把握し、小学校との円滑な接続ができるようにする。その上で３年間を見通した言語活動の実践計画をたてる。

②　H23 年度の実践

自分の考えや意志を伝える表現を PC のプレゼンテーションソフトなどを使って

インプットし、ワークシートを用いて自分の考えをアウトプットする。

③　H23 年度実践後の結果（アンケートより）

ＰＣ授業については９４％が集中できており、「以前より英語で表現できる」と感じている生徒は８１％、「自分の考えを表現できる」は７３％となった。

④　実践方法の改善

ワークシートの改善、ペアやグループでの情報交換（チャットタイム）などを取り入れることで、英文の数、使用単語数が増えることにつながった。

（２）　成果と課題

これまでの取り組みにより、生徒の意識を高め、意欲を向上させ、自信を高めることができた。今後は小学校、高校との連携を深めるとともに、他校の取組などの情報を収集し、生徒が安心して取り組める環境を整備し、継続的に取り組んでいく必要がある。

2　協議内容（質疑応答）

Ｑ：チャットタイムとはどんなものか

Ａ：隣同士、あるいは３人ぐらいで「自分はこう思う」ということを日本語で伝え合う。自分の考えを聞いてもらうことで、生徒は安心でき、自信が持てるようになる。

Ｑ：課題を書き上げる時間について

Ａ：最初は時間がかかったが、だんだん慣れてきて、それほど時間がかからなくなった。

Ｑ：評価について

Ａ：量的なもの（文や単語の数）や正確さなどで評価している。これからも研究が必要だと思う。

Ｑ：文と文のつなぎの指導について

Ａ：プリント等でつなぎ言葉を例示している。また、生徒が質問した時に随時教えていく。つなぎ言葉を使っていくうちに定着していく。

Ｑ：「書く力」の習慣化と定着について

Ａ：一年生から「書くこと」を行っているので、ある程度習慣化できている。生徒同士の教え合いや学び合いによって、定着を図っている。

Ｑ：「書く」活動において、生徒が辞書に書かれた文を丸写しにした場合について

Ａ：辞書で調べて、活用しているという点では、生徒の力になっていると思う。ただし、その英文が生徒の本当の考えかどうかを読み取る事は難しい。

3　まとめ

（１）　「研究」というと難しいと思われるが、教科の研究は日々実践していくことであり、難しいことではない。テーマを設定し、研究の重点を決め、計画・実践し、それを共有し、まとめて、課題を見つけていけばいい。

（２）　指導計画は３年間を見通さなくてはならない。生徒の発達段階を考慮し、３年間－各学年－各学期－単元－本時というように計画をたてる。そして計画に対する評価と見直しをしていく。

（３）　学習指導要領にもある通り、基礎、基本を習得し、活用することによって、思考力・判断力・表現力にせまっていく。その有効な方法が言語活動の充実であり、それが「生きる力」へとつながっていく。言語活動の充実の位置づけを明確にして取り組んでいくこと。

（４）　評価を考えるとき、忘れてはいけないのが、指導と評価である。
（５）　研究のまとめとして、生徒がどう変わったかはもちろんのこと、教師がどう変わったのかを考えていくことが大事である。

４．協議の柱に即した協議（グループ協議とその発表）

（１）習った表現を使わせたい。ノートをふりかえりながら英作文に取り組むなど、１学年からの積み重ねが大切である。また、読み手を意識して書くように指導したい。
生徒たちが興味を持って取り組んだ英会話の実践例： ALT を映画に誘うというテーマで、生徒が一人ずつ ALT と会話する。ALT はなかなか Yes と言わない。クラスの生徒たちはそのやりとりを見ながら、どう誘えば Yes と言ってくれるかを考えて、一人ずつ順番に会話する。いろいろな誘い方を試みるうちに、ALT が Yes と答えてくれる、というもの。
自分の中に言いたいことを持っていないと、言語活動につながっていかない。

（２）作文の課題では、書くことが思い浮かばず取り組めない生徒もいるため、二択や選択肢などで書く内容を設定することが大切。スピーチでは、発表だけを評価資料とする、または原稿と発表の両方を評価資料とする等、いろいろなパターンがある。
新出文法で毎回２～３文作文して発表する等、１学年から少しずつ積み重ねていき、英語を話す機会をたくさんつくりたい。

（３）書く指導では、はじめに例文や選択肢をたくさん与える等のスモールステップをふむ。また場面設定などの条件を与えて書かせる。取り組んだことを定期テストにつなげる。授業の中での時間確保が課題だったが、週４時間になり余裕がでてきた。週１回の少人数で教科書を使わずに英作文に取り組んでいるところもあった。

（４）ライティングには２種類ある。（教科書のモデル文を真似る、自分のオリジナルの表現）
達成感を味わわせることが大切。自由英作文のチェックは、時間の確保が課題である。

（５）生徒が一人で英作文を書くのは難しいので、グループで取り組む、イメージマップを作る、グループ・クラス・学年で作文を見せあう／コメントを書く等、お互いの学び合いを活用するのは良い方法である。1 minute talk や辞書の活用も話題に出た。相手にどう伝わるかを考えながら書く／話すことが大切である。

（６）新学習指導要領による平成２４年度からの新しい教科書は、書く活動が充実している。日本語で情報交換してから英作文に取り組む等、段階をふんでステップアップしていく。英作文のチェックはポイントを絞って行う。英語に限らず、自分のことを表現するのが苦手な生徒たちがいる。新しい教科書は文章量と単語数が多いため、生徒の実態に応じてワークシートを作る等、工夫している。

５．まとめ

小学校で使われている英語ノート、Hi, friends! では、How many～? Turn right/left. などの場面設定がしっかりしている。入門期には、場面設定の中でたくさん聞かせてたくさん話させる。このしっかりした場面設定があることで、All English が可能なのではないか。

また 100 回の意味のない繰り返しより１回の情動の伴うやり取りのほうが大事である。活動ベースにした書く活動の定着に、生徒が思考判断する時間と場面をたくさん設定する。生徒が英語で書く活動をバランスよくたくさん設定して､だんだんステップアップしていく。年間計画により３年間を通してバランス良く４技能を育てていくことが求められている。